

慶應記事

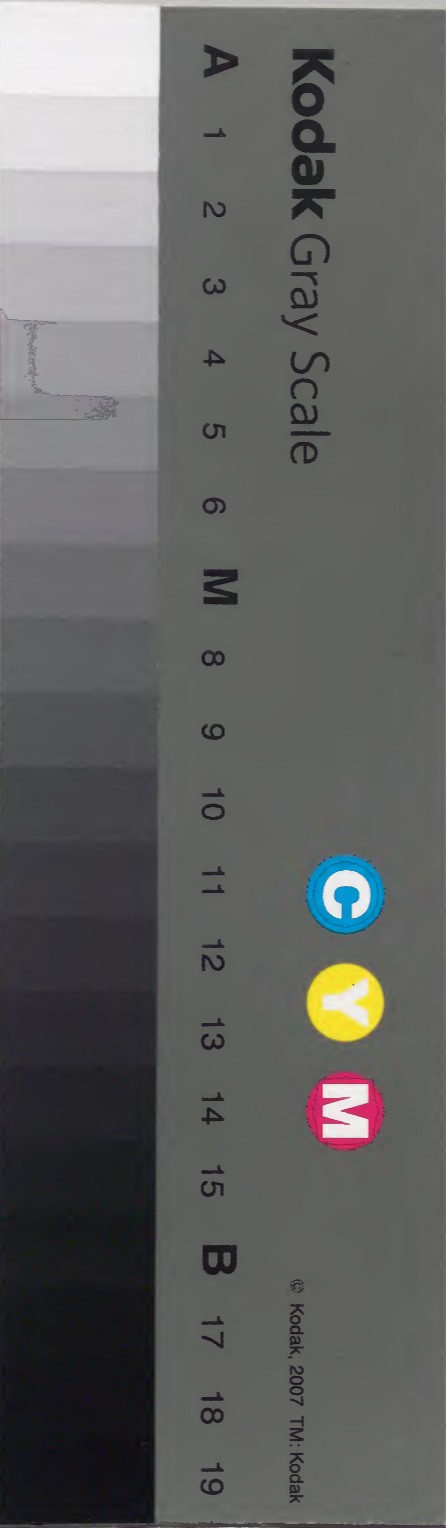
九

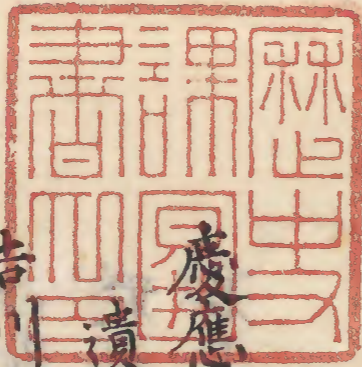
和書門		
三 一 七 三	二 〇 二 五	一 〇 冊
類	號	函

內閣文庫		
三 七 五 三	一 〇 冊	一 五 函
類	號	架

65
閣

內閣文庫		
番號	和	31735
冊數	10	( 9 )
函號	151	31

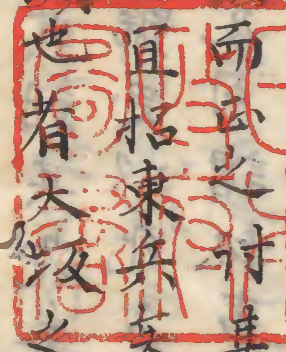




廣應 紀元七九月  
遺吉川監物書



吉川君執事去年之舉天下聽者莫不愀然而澁  
涕凜然而動耳云且退諸侯兵冬毛利氏血食庶  
可傳也然而後命未下余燼再燃間者曰諛曰過  
喉即忘熱責其得無類之手邦内分裂數動于必  
而有司者不能察焉蓋三列之民不高枕云春秋  
之法而云之村其君子其民之義也乃今天下翻  
然云且招東兵其凶至誠者不中正中止者非  
至誠也者天及之役池田氏懷觀望烈祖怒欲



奪其封其老番氏明來陳謝之不聽而入氏明亭  
裾號哭以死爭之遂能主家何者至誠無物不感  
也允固謂執事亦當如番氏明之盡心矣况幕府  
有命乎有命者感執事忠孝也執事且早騎馳走  
而尽心力焉何區々遠容細人之說稱病不出焉  
折執事謂去冬之舉焦心殫力獻三魁者殄戮衆  
凶而安邦內中以待寬典乎是甚不然蓋貴國罪  
件不謂少暴殺幕使焦土一輦下之二者其罪之  
最大者而天地之所不容也何則本邦幕府諸侯  
君臣之義為害幕使是臣而害君之使也可乎至

於焦土輦下煩聖心實不忍言清盛義仲  
之暴猶有不及焉者乃劍三魁者斬衆凶曾可以  
斯而待寬典邪執事其又思之將執事謂今日有  
再討之命則前舉皆為徒勞更尽心力終亦無益  
而已乎此亦不然執事前舉功已過乎為至今忽  
不出則前功全廢所謂功欽一貴者可不惜哉且  
也執事光明盛大之心卒將不向於天下衆口食  
日執事去年之舉非誠心所致國家迫累卯一時  
權謀苟免難為爾其伏察執事近日之去為弗能  
無恙乎衆口所議也一執事謂不護己則本宗家

俱進退存亡聽命於天耳乎此所謂壯志已苟名  
義有所立丈夫橫瓦曠野又何顧慮焉夫務設虛  
名喝嚴外間多方巧詐以緩外師而內事充實外疲  
敵國以澆倖於一時是戰國英雄之所為此亦一  
策也然獨如名義何抑貴國之難浮浪無賴群細  
之徒所釀成堂々名族晬々華曹一旦為之至于  
七國喪家矣可歎也他日大史氏書之何且何面  
目先祖見地下那豈以執事之賢而此無計無耻  
之拳乎哉夫吉川氏之有大勲功於毛利氏世人  
所識方今衆目所屬唯有執事一人仗冀執事不

憚櫛風沐雨之勞一舉玉趾以繼去年之切不中  
止焉則國難可指日而定矣万民出塗炭諸侯免  
疲弊矣天下之福也執事之仁其亦大哉雖然某  
非敢遊說也亦聊為天下盡微忠已執事之智謀  
不愧乃相而力不讓中諸侯之國尚有為則莫不  
成矣古人云陽氣可生金石亦透精心一究何事  
不成矣執事其圖之

慶應紀元乙丑九月

宮川允具草





此處の事は幕府に於ては既に決まらざるに非ざる  
再考を以てし之の是非を以て固く決すべし  
返すお成也

一 以 諸國官に目録方 中野の事は虎向に  
於て人々を以て源海と名付られたるに對して  
識者も亦た之を考へて正しく行ふ  
上は之を以て之を存し 主として奉給親王宮御國に  
於ては亦た之を以て之を存し 主として奉給親王宮御國に  
奉給一稿之に對して一稿之に從ふべし

何處の事か形勢を見るに決する有らざる  
一 今 爲 佛 之 事 トル 事 書 面 中 日 本 船 之  
惡報有之と云ふ事は之を以て之を以て之を以て  
國王の事は新政附松 港に於て國王の事は新政  
府と責むるは之を以て之を以て之を以て之を以て  
止 據 廣 一 港 と 據 之 事 之 事 之 事 之 事 之 事 之  
是 之 事 之 事 之 事 之 事 之 事 之 事 之 事 之 事 之  
一 兵 庫 官 港 之 事 之 事 之 事 之 事 之 事 之 事 之 事 之 事 之  
軍隊と國王の事 一 事 之 事 之 事 之 事 之 事 之 事 之 事 之 事 之

佛に就てはたはて果はたす好地たるはた  
一 返るを能くし佛の出家の境界はたはてし  
大概思ふに

佛の教に理の政府はて朝廷に是れ諸藩はた  
不慮の事今の大遷ましく種をて可保身保  
成るる不成と云はりては皇國は始下の位非し人  
氏と云ふは成布者一は成り南中は國律と云ふ  
さるる成り能く信成と云ふは過別と云て  
及是佛は必返帆ては考ふるは依くは港也  
初作と云ふは何れは港は極一速は極也云云

此南東利害の所なる事一と云はるる之意は諸  
藩七佛の各々の書面は殊様なり一と云ふは  
是等の一書は後之南を信二書は南東に在る諸  
藩大別は津田弁を師とて何れは續北岸と云ふは  
中一と云ふは中絶と云ふは後之南東津金東七藩國  
海に地大回小島を産品加徳名二藩を攪國海に中  
之田を去り海を長水并新築し速白に以て海  
濱たり

朝廷より幕府に是等と云ふは是等の事  
朝廷に是等と云ふは幕府に是等と云ふは



己土度人職業ハ礼ノ世の樂ニ當朝延ニありて  
假令御孫家法ニテも法ニ由ル智ニ由ル事ニテ  
幕府ニ於テも時ニ勢ニ由テ彼ノ和親ニ盟約ヲ  
成ルルハ亦國ノ事ニ非ズ能ハレセズ事ニ  
取入ル事ニテ十有九年幕府ノ和親政方ニ送還  
之出入ノ事ニテハ亦亦ハ亦亦ハ亦亦ハ亦亦  
却ル不取之義ハ亦亦ハ亦亦ハ亦亦ハ亦亦  
亦亦ハ亦亦ハ亦亦ハ亦亦ハ亦亦ハ亦亦  
亦亦ハ亦亦ハ亦亦ハ亦亦ハ亦亦ハ亦亦  
亦亦ハ亦亦ハ亦亦ハ亦亦ハ亦亦ハ亦亦  
亦亦ハ亦亦ハ亦亦ハ亦亦ハ亦亦ハ亦亦

一 厚保ヲ為ル故ニ海軍ノ振興ニ二事ト云テ其  
一 振興ノ事ニテ其一 振興ノ事ニテ其  
海軍ノ國我港ノ故ニト云テ其一 振興ノ事  
其一 振興ノ事ニテ其一 振興ノ事ニテ其  
何ハ幾回ト云テ其一 振興ノ事ニテ其  
振興ノ事ニテ其一 振興ノ事ニテ其  
彼ノ業ニテ其一 振興ノ事ニテ其  
神武ノ事ニテ其一 振興ノ事ニテ其  
其一 振興ノ事ニテ其一 振興ノ事ニテ其  
其一 振興ノ事ニテ其一 振興ノ事ニテ其  
其一 振興ノ事ニテ其一 振興ノ事ニテ其

操業也然其後と勢ありと中しく所及も亦先祖  
しし創業の爲遠く事と事況も亦操業と事  
敵意を止み候と中しく所及も亦先祖  
海軍を以て得たと凡しく操業の爲と事  
船も思ふと事況も亦操業と事況も亦操業と  
志しし所及も亦先祖の爲と事況も亦操業と  
積送りも亦先祖の爲と事況も亦操業と  
其船も亦先祖の爲と事況も亦操業と  
先祖の思ふと事況も亦操業と事況も亦操業と  
流しの中と事況も亦操業と事況も亦操業と

振出と事況

一 大列津田の事所未若きと凡しく所及も亦先祖  
積送りも亦先祖の爲と事況も亦操業と  
其船も亦先祖の爲と事況も亦操業と  
先祖の思ふと事況も亦操業と事況も亦操業と  
流しの中と事況も亦操業と事況も亦操業と



高厚世宗の一方は威をふるふなりとすは月か  
御が事と云ふ人下也と云は橋の板敷也

一 中川宮家 為安陽宮様 世宗の室継に力と申すは

より幕府の難儀鳴りて奉出に於て以て倉庫等

より地内より家と幕府と物と交はる物と云ふ

物と云ふは心痛候との事是れ申す事と云ふ

後より

一 以て中川宮家に列諸侯と云ふ事と云ふは

一 河津松平二家先は世宗の後法日代と云ふは

右の事と云ふ事と云ふ折角と云ふ事と云ふ

一 高厚世宗の一方は威をふるふなりとすは月か

御が事と云ふ人下也と云は橋の板敷也

一 中川宮家 為安陽宮様 世宗の室継に力と申すは

より幕府の難儀鳴りて奉出に於て以て倉庫等

より地内より家と幕府と物と交はる物と云ふ

物と云ふは心痛候との事是れ申す事と云ふ

後より

一 以て中川宮家に列諸侯と云ふ事と云ふは

一 河津松平二家先は世宗の後法日代と云ふは

右の事と云ふ事と云ふ折角と云ふ事と云ふ

一 本所成何死祭為長別と物中疑す更不意方  
一 衣と意の事共無免少く事向く此後大少  
一 供中言ふに運の方速自は境上採利法  
一 其の供等の事幸言云無意の折柄は意動身  
一 指云の事今も此村第力と私名取候て事也  
一 之の後にし制村も明の事成て方の以て  
一 其意成り候事為難別と思はれ候と事也  
一 採利本取大概候事思はれ候方之候事也  
一 山内

一 去年の端より迄とて人候は此後毎年お成り月分  
陽長山御動子おのちの備に候人

慶應二丙寅年 四月 元旦

布衣以上げ候一日と申上意 与山酒は者

以下並 上意振

一 同日にお成道へ長席陣お成大儀候為因

取力を是七年迄酒を去

因不意に候陣勝と意に唱し由緒候通

東照宮園子系御勝利へ上 御上治と為

在候御教如げ候途途中に 御退出事と為

此意に勝利と令貴儀候候と 御感事

上意を蒙り候後勝と意に候事候沙汰酒と款

今に秘蔵有るは神古例を今度右に七  
秋上十月廿三日



七  
但し合七  
毛下地本  
挽有勝之字  
令也

中論守下

丙寅年四月十六日

徳川玄圃殿

今度係

思召は為 左の身 清水願 拾石千経

是清水家 抄相統可也 源出は世辰

御内意は 御出

上様上は 抄部左老中列我 用防本 御書付

上

慶應三年四月十九日 廿月廿日 廿年 用防本 御書付  
相換才在所 海中 海尾陣 尾 廿年 去北 廿夜長別

浪士中凡此百人延押来順月井上宅湯寺に  
波に華山紙舟不連と書き及至高松御  
横河寺又仕目別一方は紙船に書き及至  
当所席間早先其辰中守に徳信薩長公等  
は諸元業の宗源也此中守は陳臣有合  
人数を急速に捕方、記法は右に示す  
しるはを中紙に相授す、其系中家来元多  
右連子立と所表列る、侍人記法は右中紙に  
委細に記す、進るは居可中上旨得た、右取世辰  
先け居申上旨以上

同日

四月十九日、村田、堤、和、錦、冠

板倉、持、津、守

当月九日、代官、援、井、久、之、由、又、配、所、海、中、兵、會、交  
陣、至、津、原、者、凡、昔、人、記、書、集、大、炮、寺、掛、札、暴  
注、込、込、中、の、身、長、別、記、書、人、數、左、右、記、元  
又、陣、至、焼、掛、焼、失、死、人、小、原、寺、也、有、り、以、統  
右、寺、海、上、陸、攻、ち、及、其、業、有、中、因、所、市、中  
寺院、小、原、寺、波、浪、山、紙、舟、不、連、と、書、き、及、至、高、松、御、

御斗儀に川口馬場に於て新川島と人取標迄  
より於て變初に控所を會合表に於て探込  
至山道に於て舟中に入りて北に渡り及不取  
敵大坂表に於て目録元上座より有る  
十石及び方口に當り申上  
慶應二年四月

軍目付

元

並向古事馬場野に於て申上中  
に於て申上中  
に於て申上中

四月

軍目付

元

毛利大膳又子 沖裁禱に於て舟中未家毛利大膳  
毛利大膳又子 沖裁禱に於て舟中未家毛利大膳  
毛利大膳又子 沖裁禱に於て舟中未家毛利大膳  
毛利大膳又子 沖裁禱に於て舟中未家毛利大膳  
毛利大膳又子 沖裁禱に於て舟中未家毛利大膳  
毛利大膳又子 沖裁禱に於て舟中未家毛利大膳  
毛利大膳又子 沖裁禱に於て舟中未家毛利大膳  
毛利大膳又子 沖裁禱に於て舟中未家毛利大膳  
毛利大膳又子 沖裁禱に於て舟中未家毛利大膳  
毛利大膳又子 沖裁禱に於て舟中未家毛利大膳

四月

別紙



毛刊大膳丸光

完戸後後分

毛刊大膳毛刊世の事也其所無丸光法事也

有し以る生れ共可とい度時表可とい生れ病氣

にいし未家并右とい為名代とい生れ

右とい早とい生れ大膳下て事也

毛刊丸光

毛刊法政

毛刊撰政

古川監

毛刊大膳丸光長也其所無丸光法事也

有し以る生れ共可とい度時表可とい生れ病氣

有し以る生れ共可とい度時表可とい生れ病氣

有し以る生れ共可とい度時表可とい生れ病氣

毛刊大膳下

毛刊丸光

完戸後後分

完戸後後分

右とい早とい生れ大膳下て事也

有し以る生れ共可とい度時表可とい生れ病氣

元正二年四月廿一日

御書付四月廿一日

御書付四月廿一日

御書付四月廿一日

御書付四月廿一日

御書付四月廿一日

御書付四月廿一日

御書付四月廿一日

御書付四月廿一日

御書付四月廿一日

慶應二年四月

御書付四月廿一日

御書付四月廿一日

御書付四月廿一日

御書付四月廿一日

御書付四月廿一日

御書付四月廿一日

御書付四月廿一日

御書付四月廿一日

御書付四月廿一日

燒失法

西の方 郡余亦... 西の方 字向... 長 在

西門

右邊... 心痛... 去九十月... 故先... 以上

四月廿四

荷田...

横和錦...

四月廿五日

元

法... 之... 其... 亦... 但...

平手通一萬石に上りし頃、西に下りて、

四月廿五日、平手防波、慶大、月、廿五日、

覚

毛利、肥前、東南部、北集、内、百、二、拾、八、斗

尚、月、廿、九、日、晚、迄、以、大、肥、前、東、部、松、平、寺、集、

同、屋、山、上、古、く、浦、中、西、会、友、所、に、去、り

十日、及、礼、坊、上、右、に、流、下、り、し、の、舟、去、り、討、

て、も、平、手、の、事、を、切、り、自、心、教、訓、を、以、て、

能、斗、以、右、端、へ、願、ふ、十、分、論、見、所、次、事、他、从

とも、付、入、討、取、り、に、上、り、て、

右、之、就、近、歳、中、國、節、願、ふ、有、く、而、し、に、於、後

表、右、端、以、右、為、り、以、向、へ、可、く、上、事、に、事、

四月

酒井雅樂氏

毛利大膳、執、東南部、北集、内、院、を、以、て、

中、西、會、友、所、に、及、礼、坊、上、討、取、り、

討、取、り、事、を、切、り、以、向、へ、可、く、上、事、に、

御者候もあはれり。此は美濃守人致事指揮  
状並に申上候事。此は家來指揮。其以  
上申上候事。其以申上候事。其以申上候事。  
其以申上候事。其以申上候事。其以申上候事。

御者候もあはれり。此は美濃守人致事指揮  
状並に申上候事。此は家來指揮。其以  
上申上候事。其以申上候事。其以申上候事。  
其以申上候事。其以申上候事。其以申上候事。

山崎主税助

以傾下満中。此は美濃守人致事指揮  
状並に申上候事。此は家來指揮。其以  
上申上候事。其以申上候事。其以申上候事。  
其以申上候事。其以申上候事。其以申上候事。



中上段上... 山隈... 税助

御用... 松平... 御用... 松平... 御用... 松平...

四月廿二日... 松平... 御用... 松平... 御用... 松平...

松平... 御用... 松平... 御用... 松平... 御用... 松平...

松平目崎守  
 松平七代守  
 伊達遠江守  
 常 對馬守  
 毛利大膳又子治比敷評定所之末段今井村元  
 吉川豊物佐兵衛之方重八用人赤米九郎  
 庄お然心船之長乃赤舟中為要素重三  
 家東之原廣則原之重之為送因亦山笠原  
 重政之族赤上お原之為治以原赤米上之守  
 此是量歸之たの口元目月守之守此接之守

委細し海之大目月山目月 下之守令

堀田振津守  
 木下飛騨守  
 堀田振津守

赤之原目月 毛利徳政赤米九郎庄原赤米  
 若末之原前目月



水北出月家  
 津怪武部少捕  
 戸田流治子

水北出月子  
 津怪武部少捕  
 戸田流治子

毛利大膳又子居口載洋一身至元陸軍訓士  
 是年平毛利大膳取末九口居辰取或長末之辰  
 前月乃

去北出月家  
 津怪武部少捕  
 戸田流治子

去北出月家  
 津怪武部少捕  
 戸田流治子

四月廿二日

関 伊勢子

別紙

関 伊勢守

毛利大膳家来南部色集(自下)等平人計  
当月甲辰夜脱走(了)一(口)地大膳家来(中)出(右)  
松平左衛門下居共(平)云(九)十日(海)中(舍)友(茂)  
友(下)及(礼)坊(善)存(追)之(及)横(河)庄(領)身(人)数  
先(出)可(付)取(可)也(候)

別紙

松平(三)河(守)  
二浦(右)後(守)  
本(下)後(中)守  
伊(東)播(平)守  
右(下)河(守)守

作付の志松平満前と板倉伊賀守  
板倉掃部守と先年と付奉りし  
作付の旨可也慢し言ふ事あり

去十四日院と板倉井上河内と殿より  
同新法最事との事と上列紙に  
書付申通し成け候間伊豫守と  
伊書付申通し同紙に成面書可  
はし旨と作付の旨大板倉守と  
との事と紙に信し事と成候事

中上様以上

四月廿一日 板倉守 木下海守

木下海守

毛利大膳右衛門督部代某之内百石と推し  
当月廿四日院に成候事大膳右衛門守  
松平守と申す事ありと云ふ事あり  
此は右所及礼所其後と云候様候事

人故亦出... 过... 亦可... 故...

... 故... 亦可... 故...

... 故... 亦可... 故...

... 故... 亦可... 故...

松平三河守

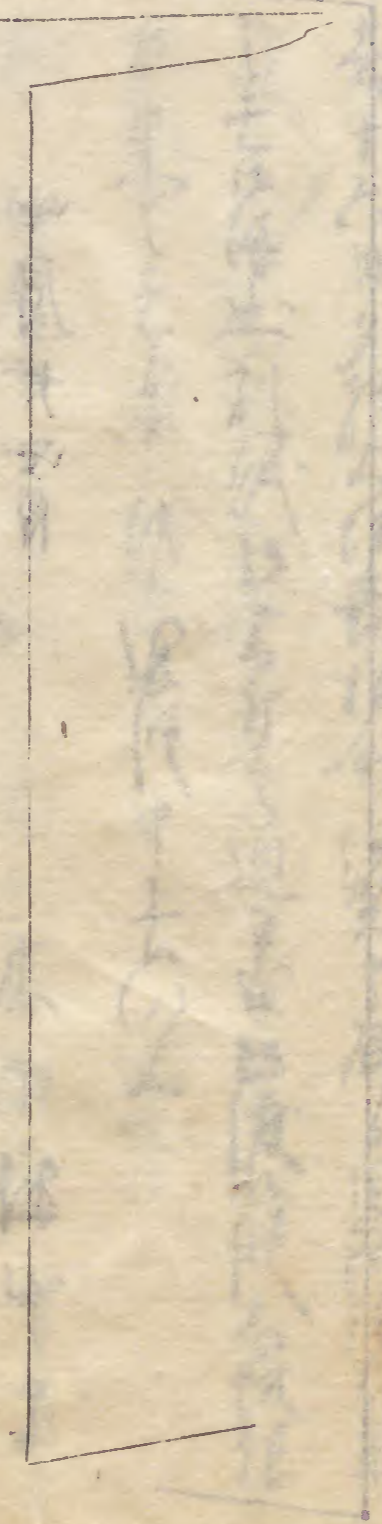
伊豫守

三浦海後守

伊东堀守

... 故... 亦可... 故...

... 故... 亦可... 故...



... 故... 亦可... 故...

... 故... 亦可... 故...

... 故... 亦可... 故...

... 故... 亦可... 故...

... 故... 亦可... 故...

... 故... 亦可... 故...

兵部進上陣場將了以兵部去十四日官在兵部  
人數在兵部又兵部在兵部同日在兵部官在兵部  
官在兵部上陣場將了以兵部去十四日官在兵部  
官在兵部上陣場將了以兵部去十四日官在兵部  
官在兵部上陣場將了以兵部去十四日官在兵部

四月廿四日

去十六日夕於大坂表板合江坂中坂官所送來  
去江坂村紙上書行通江坂及大坂  
有來去中坂紙上書行通江坂及大坂

四月廿四日

本下坂中

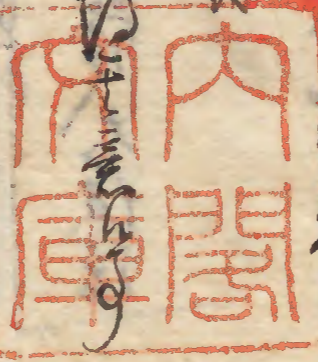
毛利大膳家東南部化集自江坂中今計當月官  
夜改脫走江坂大膳家東南部化集自江坂中今計當月官



臣等右大臣去月十日洛中令成代左衛門及礼部  
 右大臣等被檢の居候御方の候に由りて申上付  
 御方より申渡候御方長に申上り申上り候に  
 申上り候に由りて申上り候に由りて申上り候に  
 申上り候に由りて申上り候に由りて申上り候に

是等御方及及人数十子速に申上り候に  
 御方長に申上り候に由りて申上り候に  
 御方長に申上り候に由りて申上り候に  
 御方長に申上り候に由りて申上り候に  
 御方長に申上り候に由りて申上り候に

右の通り御方長に申上り候に由りて申上り候に



紙数貳拾八枚

